

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1 / 3)

研究題目	〈音〉の感受を強化する指導が、多様な音楽への児童の興味を誘発する可能性に関する実証的研究	報告書作成者	阪井 恵
研究従事者	阪井 恵		
研究目的	<p>本研究の目的は、まだ音楽とは言えない〈音〉そのものの感受力を強化することが、児童が新たに出会う多様な音楽に興味を持つ契機として有効である、という仮説の検証である。</p> <p>ここでの〈音〉という表記の定義は、「立ち上がりから減衰して消えるまでの、音圧や周波数成分の経時変化などの情報を含んだ、広義の音色」である。</p> <p>研究従事者（阪井恵）は、博士論文『〈音楽づくり〉の教育的根拠に関する研究』（東京芸術大学、2010）において、音楽科教育における音楽づくりの活動は、音楽をつくるというよりむしろ「音を聴くこと」の学習としての意義が認められる、ということ論証した。その延長上にある本研究は、長期的な目標として</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 音を聴くことを通した〈音〉の感受力を強化することの意義について、現場の教員の認識を促すこと。 ② 上記のねらいを達成するための具体的な指導のノウハウを、試案として提示すること。 <p>を視野においている。</p> <p>本研究の直接の目的は、そこへ至る中期的なものであり、より具体的には、 小学校現場で1年にわたって自ら実践した「〈音〉の感受を強化する指導」が、児童の多様な音楽（とりわけ様式的に親しみのない音楽）への興味を誘発するために有効であるかどうかを、一定程度まで実証性を示して検証すること である。</p>		

研究内容

■研究の方法

平成 24 年度、4 月から 3 月にかけて、品川区立立会小学校（星野豊校長）3 年生 3 クラスで、〈音〉を聴く活動を月 2 回程度合計 17 回行った。研究従事者（阪井恵）自らが計画を立て、立会小学校の音楽専科教諭と相談の上、年間の指導計画にも配慮しながら実施し、各回およそ 20 分程度の時間を費やした。

この、児童が〈音〉を聴く力をつけることをねらった実践の積み重ねの上で、平成 25 年 2 月に、尺八、ギター、ベースの演奏家の協力を得て、児童向けの学年コンサートを企画・開催した。コンサート後に、質問紙によって、児童が〈音〉をどのように聴いたか、またそれが音楽に興味深く聴く手掛かりとなっているかどうかを探った。

■研究の具体的内容

(1) 研究実践

研究従事者（阪井恵）による、立会小学校 3 年生に向けた研究実践の内容は、以下のようなものである。

- ① 〈音〉を聴くためのシンプルな活動：手拍子回しとそのヴァリエーション、数種類の紙・石・ビン・学用品などから色々の音を出す工夫。
- ② 〈音〉を別の記号に写して表す活動：カエル・虫・鳥などの鳴き声（録音による）を動作やオノマトペで表現する工夫。
- ③ 〈音〉を捉えるための概念を学ぶ活動：「音の立ち上がり」「音色」「音のすがた」といった用語により、〈音〉のイメージを強め、定着させる工夫。
- ④ 歌唱や器楽の学習において、上記①～③における〈音〉の聴き方を、思い出し実践する工夫。（担当教諭の協力に負うところが非常に大きかった。）

(2) 研究学年コンサートの企画・開催

平成 25 年 2 月 19 日、立会小学校の体育館で、実践の対象となった 3 年生 3 クラスに向けて、研究コンサート（「音をみる・きくコンサート」）を企画・開催した。出演は、中村明一氏（作曲・尺八）、吉田光彦氏（ギター）、グレッグ・リー氏（ベース）である。中村氏と相談の上、45 分のコンサートのうち、20 分を「音のお話し」とした。内容は、周波数解析ソフトを使用して、言葉の音や楽器の音を視覚的に確認する試みである。文字に起こすと同じになる発話でも、それが話される状況に応じた多様なヴァリエーションがあること、それらを我々は使い分け・聞き分けていること、その微妙な違いは主として発音に含まれる倍音構造の違いであることを示した。さらに、尺八はきわめて多岐にわたる倍音構造をもった音を発することが可能であることも示した。その後、尺八独奏の古典曲、尺八／ギター／ベースによるジャズ曲、即興演奏を聴かせた。

1 年間の研究実践と、このコンサートにおける音や音楽への興味、聴き方とのつながりを測るために、質問紙を作成し、コンサート後に児童に記入をさせた。質的方法により分析中である。

<p>研究のポイント</p>	<p>本研究は、<u>従事者(阪井恵)によるアクションリサーチ</u>の形をとり、3年の中間計画による教育研究である。助成を受けた初年度(24年度)には、1つの小学校の音楽授業に1年間継続して入り、2年目(25年度)も、タイプの異なる別の小学校に入って実施中である。成果をまとめられるのは平成26年度末になるが、<u>現場の教員がそのまま使用することのできる教材とノウハウをも提示する</u>予定である。</p> <p>音楽教育研究としては、多様な音楽に対しての第一の判断材料となる、<u>広義の音色(本研究では〈音〉と表記)への関心を促す</u>ものである。音楽科教育においては、いまだ西洋起源の音楽が主たる教材であることも一因で、〈音〉へ認識が深まっていない。多様な音楽表現の基底にある、<u>〈音〉の倍音構造やその変化</u>について、身体を通して <u>よく聴く姿勢を培う指導</u>のノウハウを示し、<u>周波数解析や声紋分析といった視覚化の手法</u>も取り入れて、より納得のできる学習を進められるようにすること、以上が独自性のあるポイントである。</p>
<p>研究結果</p>	<p>本報告時点は、初年次の研究実践を終えた経過点である。現在までに得られた結果として、以下の点が挙げられる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 1年間の研究実践は、立会小学校の協力のもとで順調に進み、実践の記録が積み重ねられた。2年次以降、より洗練された実践方法や教材を考案する貴重な材料となった。 2. 周波数解析により〈音〉を視覚化して示すことが、児童の興味と理解を促進することが明らかになった。 3. 年間指導計画中、長期休暇を利用した「音探し」の課題が、児童の〈音〉を聴く力を高めることが明らかになった。 4. この研究実践の結果として、小学校3年生の児童は、尺八の古典曲《鶴の巣籠》に強い興味を示した。 5. 質問紙記入に関して、小学校3年生に成人向けと同じ形容詞対語による音色判断をさせるのは、困難であることが明らかになった。
<p>今後の課題</p>	<p>大きな課題は以下の2つである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 〈音〉の概念の整理と洗練：研究従事者(阪井 恵)が、本研究において〈音〉と表記している概念は、複雑な要因が絡み合い解明が困難であると共に、音楽教育学的に非常に興味深いことが認識されてきた。音楽教育に携わる人にとっての関心を高め、また出来るだけ分かり易く論じるためには、音響学、音声学、民族音楽学等の専門家の助力を得る必要がある。 2. 研究実践から得られたデータ(児童の文字記録、発言、動作)の分析手法の洗練：本報告時点までには、多くのデータが取れたにもかかわらず、1つ1つを見て KJ 法によって分類を試みる等のことしかできていない。このような質的データの解析を助ける統計ソフトの利用を検討するなど、より洗練された手法により、研究の実証性を高める必要がある。

説明書【音楽振興部門】

* 本研究は、平成 24～26 年度文部科学省科学研究費の助成を申請していた課題の、初年次部分について申請をしたものである。結果的に、科研費助成も受けることが出来た。そのため、JSPS 科研費助成課題(基盤 C) 24531155と、内容に重複があることを、ここにお断りしておきたい。

■1年間の研究実践において用いた、〈音〉を良く聴く姿勢を培うための教材＝〈音〉を楽しむための道具の例は、以下のようなものであった。



1. 塩ビ管の組み合わせによる音具



2. 平たい瓶に水を入れて並べた音具



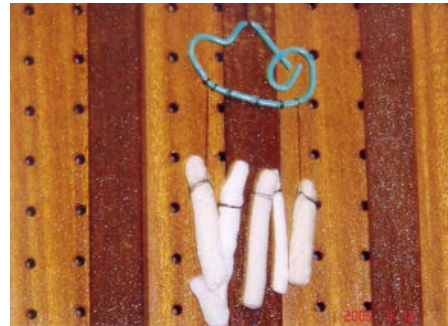
3. 一升瓶のフタの音具



4. ラムネ菓子の容器



5. 缶飲料のプルタブによる音具



6. 沖縄で拾った珊瑚の音具



7. マリン缶(スチールの飲料缶を砂時計式に組み合わせ水を入れた音具)

■夏冬の長期休暇には、児童にこのような用紙を配布し、「音探し」を課題とした。

表側

立命館小学校3年生のみなさんへ

サリー先生からのお願い


この夏の長期休暇の期間に、音楽を聴いてください。

南征四 ガチャックの玉 二片七本の心 おぼろしするハンマー トンカ (雑音) のくき
どんな音だったか覚えてますか？

夏休みに、おもしろい音や、好きだなと思う音を見つけて、2学期にしようかい
してください。 いくつ、見つけれらるかな？

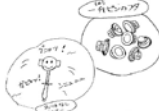


調査の 日	何の音？ どんなことに気がつきましたか？ どんなかみがありましたか？ 録音のいでいはいですか？
7月13日	水し水のほいたしやかんも アーシューのせで ふづつてしまいました。ユルヘン……という きれいな音がしました。 音でゆらゆらして いきました。
月 日	
月 日	
月 日	



裏側

月 日
月 日
月 日
月 日
月 日



3年	組	名前
----	---	----

(ウツリ 立命館大学教育学部 教授 奥井 誠)

このような「音探し」を夏冬の休みに課題とし、提出物は1人1人に共感的なコメントをつけて返却した。この課題の遂行は、〈音〉のイメージを記述する活動を含む。この課題は、様々の音をよく聴く姿勢を培うのに、効果が高いことが明らかになったが、その理由はいメージの記述⇒定着に負うのではないかと思われた。

■ 効果検証のための学年コンサートのプログラム



立命館小学校 3年生

おと・音・オト・音・OTO・音！
音をみる・きく 音楽会

音のおはなし

尺八どくそう 鶴の巣籠
尺八・ギター・ベースのコラボレーションによる
ムーンチャイルド
不思議の森の物語

演奏者
中村明一 尺八
吉田光彦 ギター
グレッグ・リー ベース

2013年2月19日(水) 14:45~2:30
福川区立立命館小学校体育館

企画者：奥井誠 (立命館大学) この研究コンサートは2010年度科学研究費24593116の助成によるものです。
1年間の研究実施についてはウェブサイト「音探しの音探し」で2013年度研究報告を受けています。

学年コンサートの時間は、正味45分。

「音のおはなし」では、efu氏がフリーで提供している周波数解析ソフトWaveSpectra(Windows用)を使用し、児童が様々の状況を想定して話す言葉の波形を確かめた。また、中村氏が尺八の試し吹きで様々な音を出し、尺八では児童が親しんでいるリコーダーのような音から、きわめて雑音性の高い音、あるいは2つ以上の音を同時に出すことまでできることも確かめた。その後《鶴の巣籠》を鑑賞したが、児童は非常に高い集中力を示した。《ムーンチャイルド》と《不思議の森の物語》はジャズ曲で、3人の演奏者に要所要所の即興演奏を展開してもらった。